



福部村埋蔵文化財調査報告書第12集

TOTTORIKEN IWAMIGUN FUKUBESON
鳥取県岩美郡福部村

AMOU
海士32号墳発掘調査報告書

2001

福部村教育委員会

第三章 海士古墳群

海士古墳群は、西方の鳥取市と境を接する標高357mの「摩尼山」山系から北方へ派生、分岐した多くの支稜線尾根端部に展開している。古墳群は、総数32基の中・小古墳で構成されており、古墳の所在する尾根末端部は急傾斜で下降する鷹の嘴を連想させる連山の様相を呈している。

古墳群の北面にはラグーンの名残である湿田地帯が広がっている。この一帯は、古来より「細川池」と呼ばれており、古墳群が築造された当時は、満々と水を湛えた湖水面が広がっていたと推定される。

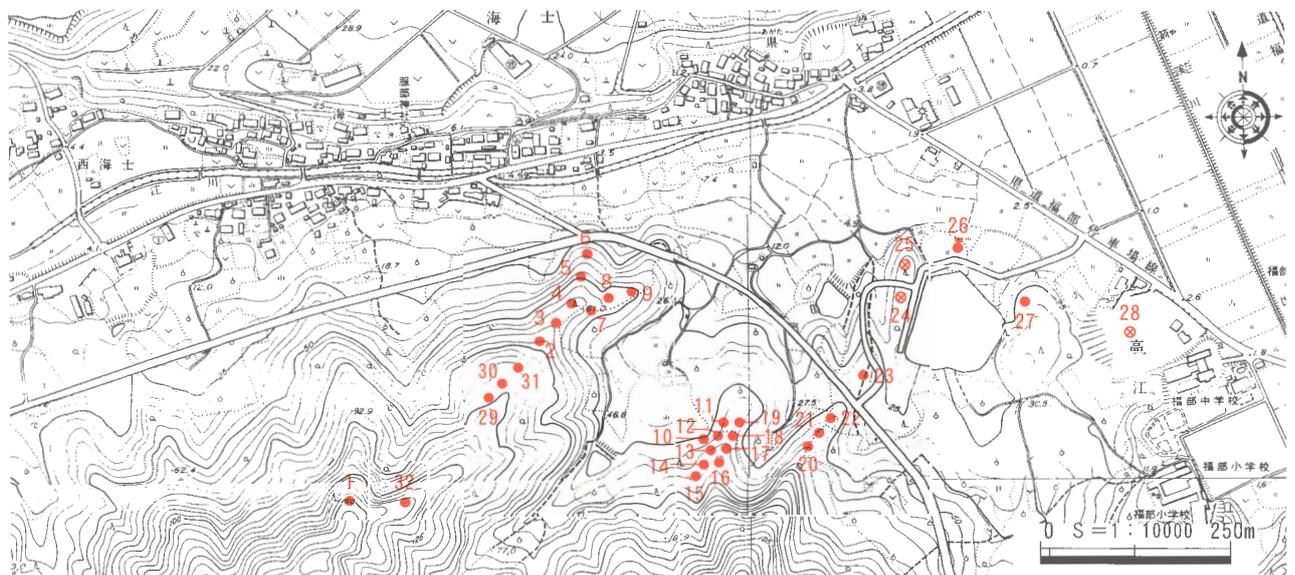
鳥取県内では、東部の「湖山池」と中部の「東郷池」、西部では当細川池のように潟湖であったと推定される淀江平野が、湖岸を望む高台に展開する代表的な古墳群として知られている。これらの古墳群は、水辺への強い拘りを以て高台を選地しており、「湖畔を望む古墳群」の葬送儀礼が強く見てとれる。

古墳の分布は、昭和51年に行われた遺跡分布調査で確認されていたものと、今回の調査によって発見された2基の円墳が新たに追加登録された。しかし、更に細密的な分布踏査を実施すれば、新たな発見の可能性を秘めている地域であると思われる。

今回の調査対象となった「海士32号墳」の立地する丘陵は、国道9号線と併流する江川が旧細川池と呼ばれる湿田地帯に注がれる直上の尾根に所在している。古墳は、尾根先端近くの標高約30m～50m比較的緩やかな稜線上に10基の小円墳が展開し、前述の典型的な湖水を望む海士古墳群の中核を構成している。

標高約50mを過ぎると、丘陵尾根は南方の峰に向けて斜度を一層増して、標高約140m付近まで急傾斜面が連続する。したがって、築造が困難なこの斜面に古墳は所在していない。

標高約140m付近まで達すると、稜線に小さなテラス状の平坦地が現れ、ここに低い墳丘を持つ小円墳の海士31号墳が所在している。更に峰方に向けて僅かに登り詰めると、標高約150m付近に再び小さな狭長のテラス状平坦地が現れる。海士32号墳は、このテラス状の平坦地に所在しており、当地から上方は切り立った稜線となって古墳等の遺跡は所在しない。



挿図3. 海士古墳群詳細分布図

詳細分布 図番号	遺 跡 名	所 在 地	墳丘形態	規 模 (m)	遺 物	備 考
1	海 士 32 号 墳	大字海士字茶園 湯谷口	円 墳	別 記	別 記	今回の調査 対象古墳
2	海 士 1 号 墳	大字海士字茶園	円 墳	径16.0・高さ2.4		
3	海 士 2 号 墳	大字海士字茶園	円 墳	径14.0・高さ1.6		
4	海 士 3 号 墳	大字海士字茶園	円 墳	径11.0・高さ1.0		
5	海 士 4 号 墳	大字海士字茶園	円 墳	径12.5・高さ1.2		
6	海 士 5 号 墳	大字海士字茶園	円 墳	径12.0・高さ1.3		
7	海 士 6 号 墳	大字海士字奥山	円 墳	径21.6・高さ2.0		
8	海 士 7 号 墳	大字海士字奥山	円 墳	径12.0・高さ1.8		
9	海 士 8 号 墳	大字海士字奥山	円 墳	径11.0・高さ1.2		
10	海 士 9 号 墳	大字海士字奥山東側	円 墳	径12.5・高さ2.0		
11	海 士 10 号 墳	大字海士字奥山東側	円 墳	径10.5・高さ1.2		
12	海 士 11 号 墳	大字海士字奥山東側	円 墳	径11.7・高さ1.5		
13	海 士 12 号 墳	大字海士字奥山東側	円 墳	径10.5・高さ1.4		
14	海 士 13 号 墳	大字海士字奥山東側	円 墳	径8.0・高さ1.0		
15	海 士 14 号 墳	大字海士字奥山東側	円 墳	径8.8・高さ1.0		
16	海 士 15 号 墳	大字海士字奥山東側	円 墳	径10.0・高さ0.5		
17	海 士 16 号 墳	大字海士字奥山東側	円 墳	径12.0・高さ1.3		
18	海 士 17 号 墳	大字海士字奥山東側	円 墳	径13.5・高さ2.0		
19	海 士 18 号 墳	大字海士字奥山東側	円 墳	径12.0・高さ1.6		
20	海 士 19 号 墳	大字海士字浪花	円 墳	径9.5・高さ1.0		
21	海 士 20 号 墳	大字海士字浪花	円 墳	径11.4・高さ1.0		
22	海 士 21 号 墳	大字海士字浪花	円 墳	径14.5・高さ1.8		
23	海 士 22 号 墳	大字海士字浪花	円 墳	径16.0・高さ1.5		
24	海 士 23 号 墳	大字海士字浪花	円 墳	径14.5・高さ1.4	須恵器 鉄刀他	昭和56年度 発掘調査
25	海 士 24 号 墳	大字海士字浪花	円 墳	径14.3・高さ1.3	須恵器 鉄鎌	昭和56年度 発掘調査
26	海 士 25 号 墳	大字海士字浪花	前方後円墳	全長不明・高さ1.5 前方幅9.0・後円幅13.0		
27	海 士 26 号 墳	大字海士字糶箱	円 墳	径11.0・高さ1.2		
28	海 士 27 号 墳	大字海士字眞名ヶ谷	円 墳	径12.3・高さ1.5	須恵器	昭和51年度 崩壊調査
29	海 士 28 号 墳	大字海士字茶園	円 墳	径10.0・高さ1.0		
30	海 士 29 号 墳	大字海士字茶園	円 墳	径8.0・高さ1.0		
31	海 士 30 号 墳	大字海士字茶園	円 墳	径10.0・高さ0.8		
32	海 士 31 号 墳	大字海士字茶園 湯谷口	円 墳	径15.0・高さ0.5		

挿表 1. 海士古墳群一覧表

第IV章 発掘調査の概要

第1節 海士32号墳の概要

海士32号墳は、前述のとおり尾根上で最高所に所在する古墳であり、海士古墳群中でも最高所に位置する古墳である。西方に位置する海士集落との比高差は約145mを測る。

墳丘の東斜面は、果樹園が放棄された後で、園木を棚吊りしていた太い針金が赤錆びて随所に放置されている。西面には、墳裾部に接して幅員が1m程度の里道が造られており、里道を建設する際に墳丘裾がわずかに削平を受けている。

墳丘の南面は、緩やかな掘り鉢状を呈しているが周溝等の墓域は特定できない。北面は、尾根稜線の下方で多量の盛土によって墳裾が明瞭に確認できる。

墳丘上から俯瞰する北方には、旧細川池、西方には海士集落と背後の砂丘地が広がり、その後方にはコバルトブルーの日本海が優美なコントラストを見せている。

第2節 発掘調査の概要

海士32号墳は、摩尼山山系から北方へ派生する尾根の主軸が、標高150m付近で北東へ屈曲し、狭長のテラス状平坦地を形成する稜線頂部に位置しており、やや北方へ張り出して築造されている。

調査は、遺跡の有無、及び遺跡として確認された場合は、その範囲を特定する当初の目的に沿ったものであり、限られた範囲での試掘調査となった。

その概要は、現地踏査によって確認していた墳丘状の凸部を中心に、作業スペースと地形測量範囲を考慮して、約300㎡の立木を伐採、墳丘の可能性が認められた頂部から南方の尾根軸線上に沿って1m×13mの南北トレンチを設定した。トレンチを掘り下げた結果、墳頂部で1基の埋葬施設を検出し、南墳裾部で墓域を画す周溝を検出した。

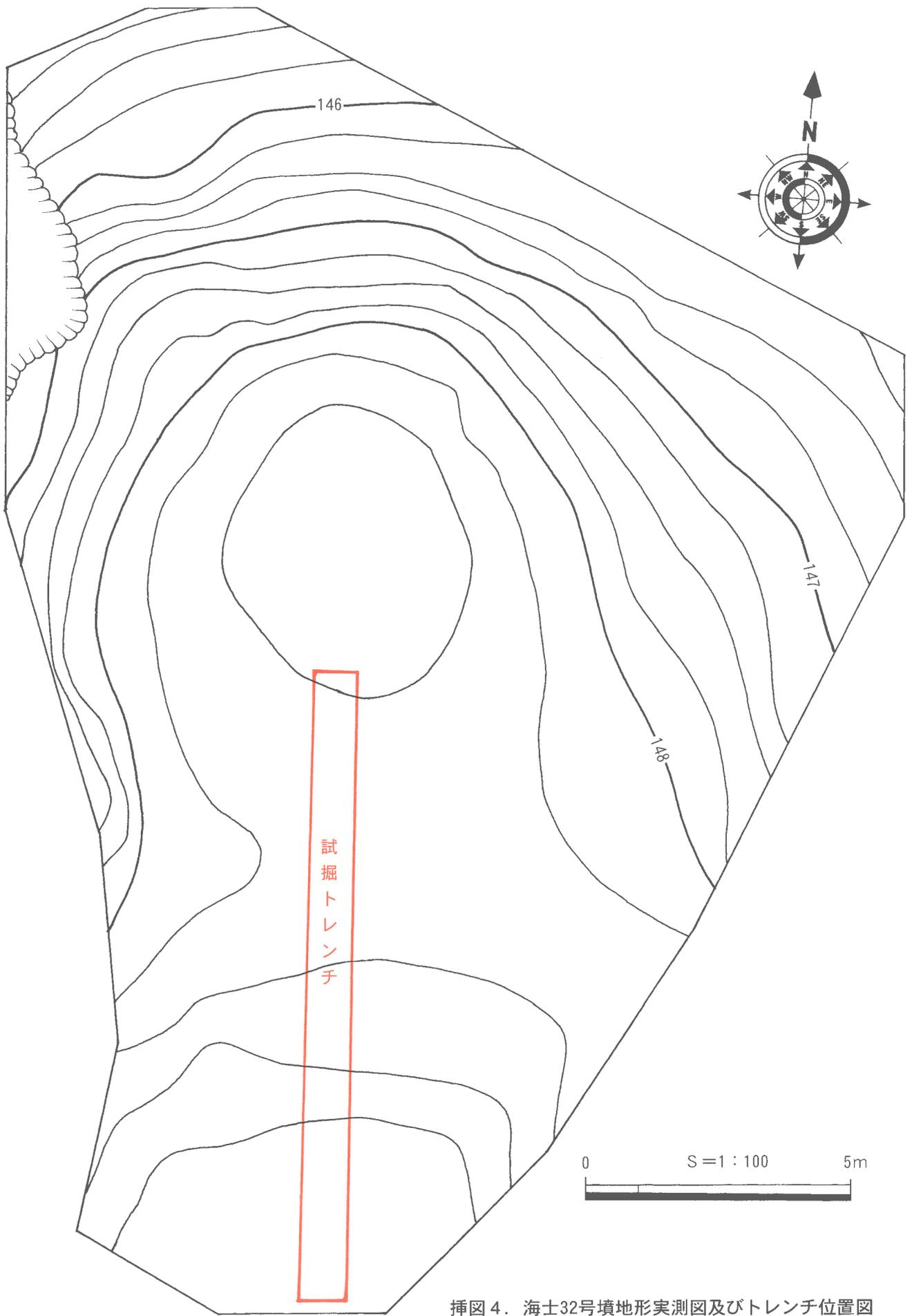
墳丘（挿図4・図版2）

墳丘の築造にあたっては、狭長の丘陵南部を掘り下げて北面に多量の盛土を施し、墳丘南裾部に周溝を穿って墳形を整えている。この築造方法は、この地方に最も多く見られる尾根の自然地形を削りだし、整形と盛土を施した後、周溝によってその墓域を区画設定したものと考えられる。

墳丘の形状は、墳頂部から南東の墳裾にかけて果樹園の造成時と思われる削平痕が認められるものの、ほぼ円形を呈している。

墳丘の規模は、直径12～13m、現況の高さ0.7mであるが、築造時には1m以上はあったと推定される小規模の円墳で、墳頂部の標高は148.7mを測る。

墳丘からは、埴輪、葺石等の外表施設は検出されなかったが、削平された墳頂部で甕、大型の蓋坏（有蓋高坏）が細片状態で検出された。検出部位、検出状況から埋葬に伴う供献土器であったと思われる。



挿図4. 海士32号墳地形実測図及びトレンチ位置図

周溝（挿図5・図版3）

墓域を区画する周溝は、墳丘の南面がトレンチ断面で検出され、西墳裾部は後世に造られた里道によって切り込まれている。したがって、墳丘の西面を除きほぼ築造当時の状態で遺存しているものと思われる。

トレンチでの周溝断面は、逆へ字状を呈し、周溝内には南の稜線と墳丘から流入したと推定される明赤褐色土が堆積しており、腐植土の混入が認められないことから、墳丘を築造後の比較的短期間で埋没したものと推定される。

埋葬施設（挿図7・図版4）

埋葬施設は、墳頂部のほぼ中央に「石棺系小竪穴式石室^{せつかんけいしやうたてあなしきせきしつ}」と呼ばれる特徴のある構造の埋葬主体部が設けられている。石棺系小竪穴式石室の特徴は、「板石を横に据えて箱式石棺の壁体を積み上げ、上面観を小口積みの竪穴式石室^(註1)に似せたもの」である。報告例は少ないものの、鳥取県内では東部を中心に点在しており、福部村内に5例が確認されている^(註2)。

この埋葬主体部は、前述のとおり墳頂部が大きく削平を受けていたことから、表土の除去中に側壁を構成する石材の上面がいきなり検出され、主体部を封棺していたであろう蓋石は全て搬出されていた。したがって、石棺内には多量の土砂が流入しており、埋葬状況を明確に把握することが不可能な部位もあった。

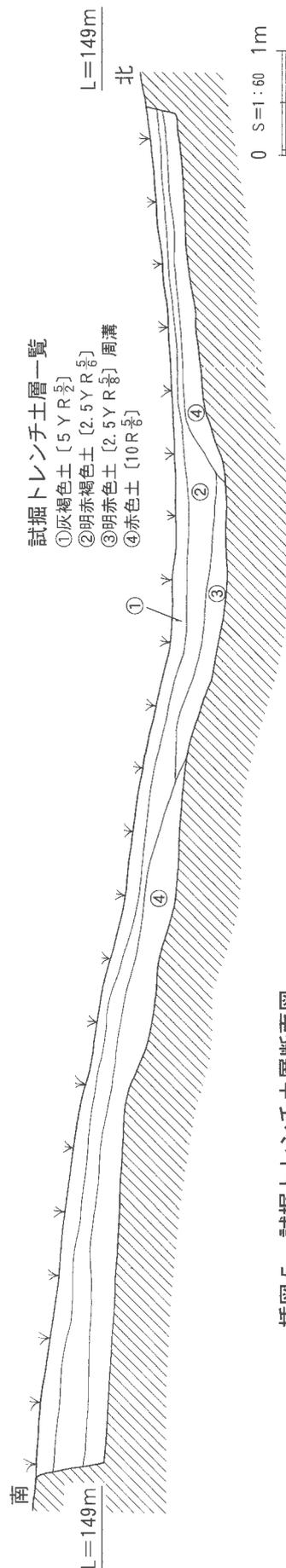
検出された主体部は、蓋石を除去されていたことで、側壁が土圧によって棺内方向へ迫り出していたが、両小口、両側壁共に完存していた。主軸はN-82°-Eをとり、尾根の稜線に直交している。

墓壇は、現地表面よりさらに上位から掘り込まれていたと思われるが、墳頂部は大きく削平されていたことから、築造当時の掘り方は不明である。更に、遺構等が発見された場合の事前協議によって、建設用地を移転することで古墳は保護されるため、掘り下げでの墓壇確認調査は行わなかった。

石棺は角閃安山岩の自然節理面を持つ扁平石を組み合わせたもので、内法で長さ195cm、西側幅65cm、中央側幅60cm、東側幅65cm、深さは西で60cm、中央で65cm、東で60cmを測る。

石棺の構築方法と順序は次のとおりである。まず、墓壇底面に棺材を立てる溝を巡らせ、両小口に1枚ずつの板石を立てる。北側壁は、西小口部に角板状節理面を持つ板石を3段に積み上げ、この石材の東端部から東小口にかけて3枚の扁平板石を墓壇底面の溝に立てている。南側壁は、3枚の扁平板石を墓壇底面の溝に立てられており、両側壁は両小口石を挟み込んで立てられている。したがって、北側壁の西面に平積みされた角板状の板石を除く側壁材は、全て厚さ3cm前後の扁平石が採用されていた。

側壁の石材と石材の継ぎ合わせかたは、北側壁が材の端部双方を接触させ



挿図5. 試掘トレンチ土層断面図

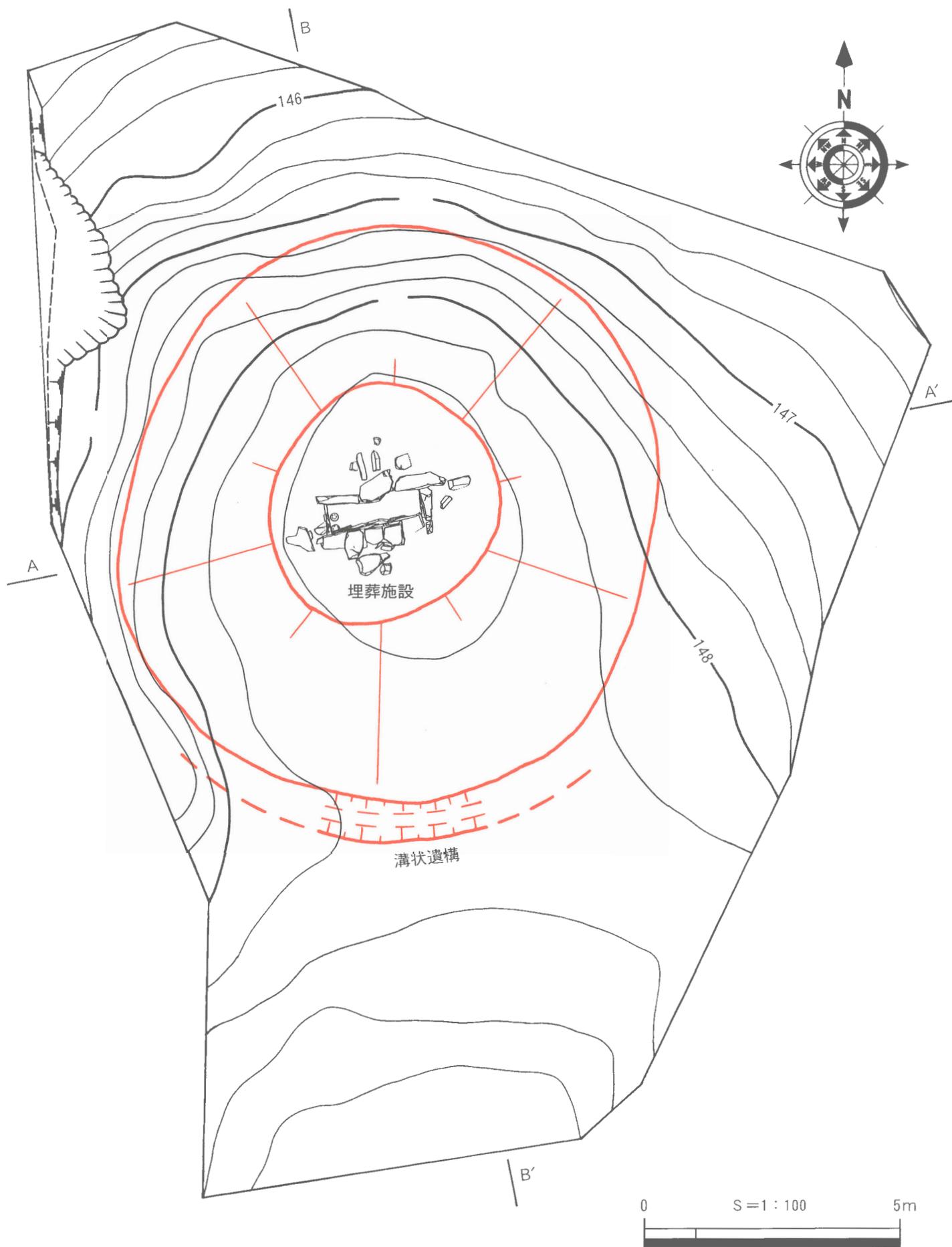


插图 6. 海士32号墳墳丘遺存図

て凹凸部の少ない側壁面を作りだしている。これに比して、南側壁は材の端部双方を重ね架けて継ぎ合わせており、内面に凹凸部が残るが、東方材の内面に西方材の端部を重ね架けする一定の規則性が見られた。この規則性は、東面の側板を立てて中央の側板を立てる際に、一定の内法を確保しながら連続的に側板を立てており、南側壁の構築順序は東面から順に立てていったものと考えられる。更に、両小口石が両側壁に挟み込まれていることから、北側壁も東面から順次構築されて行ったものと推定される。

石棺内面に立てられた側壁は、前述のとおり土圧によって内方へ上部が迫り出し、傾斜した側板の裏面に隙間無く平積みされた角礫が認められ、裏込めの施されていることが確認された。角礫の存在は、遺存する墓壇面の掘り下げを行わなかったため、その全貌は明らかにできなかったが、確認できる範囲での観察では、石材の節理面を側板の裏面に密着させて固定している。

前述の東小口と側板の上部には、厚さ約3cmの板石～15cmの角柱に近い板石が2段から3段に平積みされている。平積みされている石材は、加工痕も無く自然節理面を持つ山石で、長さ約20cm～1mと不揃いであるが、要所に合わせて長短辺の石材が嵌め込まれている。積み上げは側板の構築順序と同様に、東小口を起点に平積みされている。

棺床は、ほぼ平坦に整形されており、特に石材等の敷き詰めは見られなかったが、石材と石材の隙間には、黄灰色の粘質土が詰められていた。

棺内の遺物出土状況（挿図7・図版5）

石棺内は、前述のとおり蓋石が除去されていたことで、棺内に多量の明褐色土が流入しており、懸念された盗掘からは免れて副葬品の蓋坏、勾玉、管玉、ガラス小玉が検出された。

これらの出土遺物は、検出状況からほぼ埋葬時の元位置を保つものと推定され、蓋石の搬出された目的は盗掘を前提としたものではなく、別の用途であったことを示唆している。

蓋坏はセットになるもので、小口石内面に接して南に坏蓋、6cmの間をとって北に坏身が伏せて並べられていた。この蓋坏は、石棺の軸線からやや南に寄せて置かれていたが、蓋と坏間に被葬者の後頭部を据えて被葬者を安置したものと思われ、各地で多くの類例を求めることができる。このことから、被葬者の頭位は西方と考えられる。また、床面に接した坏蓋と伏せられた坏身の内部に詰められた細粒の浜砂が検出された。棺床面に敷き詰められた砂の類例は稀に見られるが、土器枕に転用された坏身の内部に詰められた砂の報告例はなされていないことから、目的、その意味は分からない。

棺床の中央からやや西寄り勾玉1点、管玉1点、ガラス小玉3点が検出された。この垂飾の玉類は、まとまって検出され、前述の枕に転用した蓋坏に被葬者の頭部を据えると、胸部に匹敵する部位に位置することから、被葬者の首に掛けられていた可能性もある。

註1. 福永伸哉「近畿地方の小竪穴式石室—長法寺南原古墳前方部小石室の意義をめぐって—」『長法寺南原古墳の研究』大阪大学南原古墳調査団 1992

註2. 亀井熙人「古墳時代」『新編福部村誌』福部村 2000

《参考文献》

財鳥取市教育福祉振興会
倉吉市教育委員会

「面影山古墳群発掘調査報告書」1996
「中峯古墳群発掘調査報告書」1998

序 文

福部村は、狭い面積ながらも原始・古代の人々が力強く生活を営んだ痕跡が数多く残されており、近年の発掘調査から数多くの貴重な資料が報告されています。これらの報告では、県下でも数少ない縄文時代の遺跡が3ヶ所確認されており、この時代から本村一帯が衣食住に恵まれた定住しやすい環境にあった事を窺わせています。

特に昭和62年から3年間の継続調査が行われた「栗谷遺跡」の発掘調査では、膨大な縄文土器などの出土遺物とともに縄文時代の加工技術の高さを窺わせる木製杓子が発見され、多くの出土品と共に重要文化財に指定されています。

この調査を契機に村内に所在する遺跡の重要性が再認識され、遺跡の保護と資料館の設置により沢山の人々にご覧いただく機会ができたことを感謝しています。

今回報告する海土32号墳は、類例の少ない埋葬施設の構築方法が採用された古墳として確認されました。その埋葬形態等がわずかながらも解明されたことは、近年頻繁に行われている開発から埋蔵文化財を保護するための基礎となり意義深いものを感じています。

終わりに、今回の発掘調査事業を実施するにあたり、鳥取県教育委員会をはじめ、関係各位の多大なるご指導、ご協力に対し深甚なる感謝を捧げるとともに、発掘調査地の地権者と調査に従事していただいた皆様に対し厚く御礼申し上げ、発刊のご挨拶といたします。

平成13年3月

福部村教育委員会

教育長 老 門 辰 生

例 言

1. 本書は、株式会社デジタルツーカー中国の依頼により、1997（平成9）年度に福部村教育委員会が調査主体となって試掘調査を実施した「海士32号墳発掘調査報告書」である。
2. 発掘調査の対象となった「海士32号墳」は、鳥取県岩美郡福部村大字海士^{あもう}字茶園^{ちやえん}201・湯谷口^{ゆたにぐち}248-4に所在する海士古墳群内の1基である。
3. 発掘調査の体制は下記のとおりである。敬称略

調査委託者	株式会社デジタルツーカー中国				
調査団長	老門辰生	福部村教育委員会教育長			
調査委員	田村義朗	福部村文化財保護委員長			
	河本康二	福部村文化財保護委員			
	黒田一郎	福部村文化財保護委員			
	小谷博文	福部村文化財保護委員			
	森原増美	福部村文化財保護委員			
	横山利	福部村文化財保護委員			
調査指導	鳥取県教育委員会				
調査員	谷岡陽一	福部村教育委員会社会教育係長			
作業員	赤瀬宏	大西範成	小野浩佳	鈴木浩人	田渕範光
	田村正継	中原亮子	花原健誌	浜本節也	松本光義

4. 本書に使用した挿図の座標・方位は磁北であり、標高は東京湾潮位を基準としている。
5. 本書に掲載した挿図3の地形図は、「建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5000分の1国土基本図を複製したものである。」
6. 本書の執筆編集は、鳥取県教育委員会の指導のもとに谷岡陽一が行った。
7. 海士32号墳埋葬施設及び出土遺物（玉製品）の石材については、放送大学鳥取学習センター所長赤木三郎氏に鑑定していただいた。記して感謝いたします。
8. 出土遺物・図面・写真等の整理は、鳥取県埋蔵文化財センターの指導により調査員が行った。
9. 出土遺物・実測図等は福部村教育委員会で保管している。
10. 出土遺物には、〔例：AM32-3（海士32号墳-遺物番号3）〕をネーミングしている。
11. 発掘調査及び本報告書の刊行に際し、次の方々からご指導、ご援助をいただいた。銘記して感謝申し上げます。

(故) 亀井熙人（鳥取県教育文化財団）	中原 齊（鳥取県教育委員会事務局）
中村 浩（大谷女子大学教授）	浜本利広（土地所有者）
原田律枝（土地所有者）	(株)デジタルツーカー中国

目 次

序 文
例 言

本文目次・挿図目次・表目次・図版目次

第I章	調査に至る経緯	1
第1節	調査の経緯	1
第2節	調査の経過	1
第II章	海士古墳群の位置と環境	2
第1節	海士古墳群の位置と自然的環境	2
第2節	海士古墳群の歴史的環境	3
第III章	海士古墳群	6
第IV章	発掘調査の概要	8
第1節	海士32号墳の概要	8
第2節	発掘調査の概要	8
第V章	出土遺物	16
第VI章	海士32号墳発掘調査の成果	19
報告書抄録		21
図 版		

挿 図 目 次

挿図1. 福部村位置図	2	挿図6. 海士32号墳墳丘遺存図	11
挿図2. 福部村内遺跡分布図	4	挿図7. 海士32号墳埋葬施設(石棺)実測図	13
挿図3. 海士古墳群詳細分布図	6	挿図8. 海士32号墳出土遺物実測図(須恵器)	17
挿図4. 海士32号墳地形実測図及びトレンチ位置図	9	挿図9. 海士32号墳出土遺物実測図(玉製品)	17
挿図5. 試掘トレンチ土層断面図	10		

挿 表 目 次

挿図1. 海士古墳群一覧表	7	挿図2. 鳥取県内の石棺系小竪穴式石室一覧	15
---------------	---	-----------------------	----

図 版 目 次

図版1. 海士32号墳周辺の空中写真		図版4. ①埋葬施設完掘状況(南から)	
図版2. ①海士32号墳遠景(北の砂丘地より)		②埋葬施設完掘状況(東から)	
②海士32号墳から俯瞰した鳥取砂丘		③埋葬施設完掘状況(北から)	
③調査区全景(南東から)		④埋葬施設完掘状況(西から)	
④調査前の海士32号墳(南から)		図版5. 棺内遺物検出状況(西から)	
図版3. ①海士32号墳発掘調査作業風景		出土遺物	
②トレンチ土層堆積状況(東から)		須恵器	
③海士32号埋葬施設検出状況(南から)		玉製品	
④墳丘上の供献遺物検出状況			

第I章 調査に至る経緯

第1節 調査の経緯

急激に普及した携帯電話は、我々の私生活にも欠くことのできない必需品となっている。そんなおり(株)デジタルツーカー中国では、自動車・携帯電話の電波の届かない地域を解消するため、福部村内に中継基地局の新設を計画した。同計画は、今回の調査対象地となった福部村大字海士字茶園201・字湯谷口248-4の丘陵尾根上に基地局を新設し、西方の鳥取砂丘から南東の福部村一円の利便性を図ることが目的である。

今回の調査対象地である丘陵尾根は、この条件を満たす好適地として選地され、(株)デジタルツーカー中国より福部村教育委員会へ埋蔵文化財の有無について調査依頼が提出された。

当地は、東西に延びる国道9号線とほぼ平行して連なる丘陵尾根の標高約150mに位置し、先端部の標高約30m～50m付近には、周知の古墳として10基が確認されている。しかし、丘陵尾根は標高約50mあたりで急激に斜度が増し、標高も一層高くなることから古墳の所在については概念的に軽視されていた。

福部村教育委員会では、この依頼に基づき、建設業者の案内で現地踏査を実施した。建設予定地へは、丘陵南裾野に耕作された果樹園内を横断し、古墳群が所在している低丘陵部に取り付き、尾根を南の峰方へ縦走して現地へ到る。現地は、コナラを主体とする落葉高木と矢竹が繁茂し、小規模ながら平坦地と低いながらも円形の起伏が認められ、古墳の所在は否定できないと判断された。

また、尾根稜線の頂部から南斜面下方に向けて、赤錆た太い針金が等間隔に張られている。更に、尾根の肩部には数束の針金が廃棄されていた。これは、現在雑木が繁茂しているが、この赤錆た針金の状況から、以前はこの斜面に果樹園が耕作されていた証である。

第2節 調査の経過

この踏査結果を基に(株)デジタルツーカー中国と事前協議を行った。その結果、福部村教育委員会が調査主体となり、遺跡の有無、及び遺跡として確認された場合は、その範囲等を特定する試掘調査の実施が決定された。更にその後の対応として、遺跡が確認された場合は文化財保護を最優先し、遺跡の範囲外に中継基地局建設用地を移設することになった。また、中継基地局の建設工事着手を次年度の春に予定しており、調査日程に余裕が無いことから補助事業を断念し、(株)デジタルツーカー中国から発掘調査に要する「作業員・機材等」の全てを提供していただき調査を実施することになった。

現地での発掘調査は、調査区へ至る作業道が未設置のため、地権者の同意を得て果樹園内を一時的に横行させていただく必要があった。従って、果樹の収穫後を待って10月13日から7日間の予定で着手したが、比較的温暖で、天候に恵まれたことから予定どおりの進捗状況を見せ、10月22日で現地調査を完了し、翌年3月20日で室内整理作業を完了した。

第Ⅱ章 海士古墳群の位置と環境

第1節 海士古墳群の位置と自然的環境

福部村は鳥取県の東部で、東経134度17分、北緯35度32分に位置している。北は日本海に面し、東は日本海に突出した独立峯のような駒馳山山頂から、南に延びる立岩山山系の分水界で岩美町に接している。西は国の天然記念物に指定されている鳥取砂丘から多鯰ヶ池を経て摩尼山山系の分水界で鳥取市に接し、更に南東の稲葉山に至り、稜線を縦貫する村道宇倍野線を界して国府町に接している。

この東・西・南の三方を各山系に囲まれた内陸は、日本海沿岸に発達した砂丘が福部の湾口を閉ざし、沖積平野となって、東西約9km、南北約10km、総面積34.94km²で、日本海に開けたV字形を呈する小盆地地形を形成している。

村内には、鳥取県の縄文遺跡を代表する「栗谷遺跡」・「直浪遺跡」をはじめ、15遺跡と200基の古墳が周知の遺跡として確認されている。^(註1) その大半は1976（昭和51）年に鳥取県教育委員会と福部村教育委員会によって行われた遺跡分布調査と1993～1995（平成5・6）年度の村教育委員会による「村内遺跡発掘調査事業」を契機に遺跡台帳が整備され、突発的な開発行為等によって発見される都度追加登録がなされている。

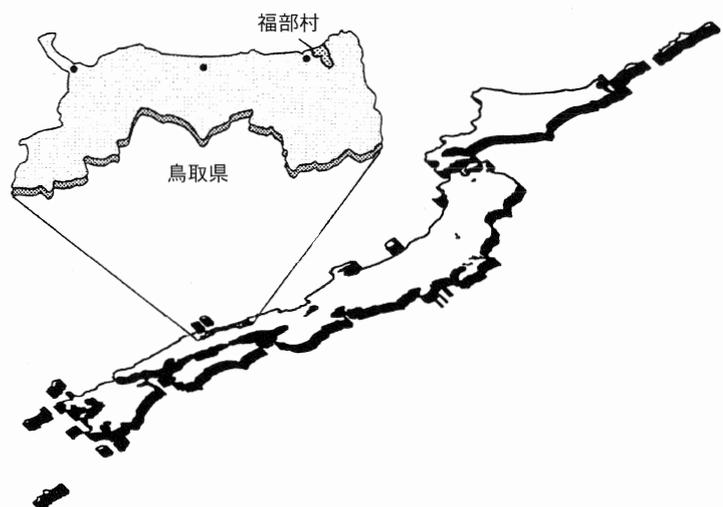
これらの遺跡と古墳群の大半は、鳥取砂丘の内陸部に形成されたラグーンの名残である湿地地帯に面する微高地と、主要河川に面する丘陵周辺に展開している。

砂丘活動の起源は約3万年といわれ、日本海から吹き寄せる偏西風によって形成された広大で不毛の地といわれた砂丘地は、大正の中頃から「らっきょう」の栽培が盛んに行われている。近年では、畑地かん水設備の導入により全国有数の生産高を誇っている。この砂丘の形成によって閉ざされた後背地は、ラグーンの名残で古くは江戸時代から干拓が行われた「湯山田圃」・「細川田圃」通称（沢）と呼ばれる湿地地帯に水稻栽培が行われており、1m前後の海拔に位置することから、降雨量が100mm程度に達すると水中に没して、潟湖のような変貌を見せる。

河川は、鳥取市、岩美町、国府町との境を接する「上野山」（標高390m）を主峰に分水界となって本流の塩見川を形成し、摩尼山山系の山麓を水源とする箭溪川、同じく摩尼山山系山麓の水源と湯山池周辺の湧水を水源とする江川の3河川が主要河川で2級河川に指定されている。この3河川は、前述の沢と呼ばれる細川田圃の湿地部で合流し、鳥取砂丘の東端を蛇行して駒馳山裾の河口へ注いでいる。

気候的には、比較的温暖で過ごしやすいが、年間降水量は1970mm前後で、山陽方面と比較するとかなり多く、冬季には平野部で50cmを越す積雪を見ることがある。

海士古墳群の所在する当地は、前述



挿図1. 福部村位置図

のラグーンを俯瞰する丘陵上に位置しており、北西には、日本海と沿岸に細長く発達した国立公園鳥取砂丘がパノラマ的風情をみせている。この砂丘南端の後背地には、縄文時代中期を主体とする直浪遺跡(2)が所在しており、遺跡の中心部と推定されている付近は、緩斜面の微高地を削平した低段丘上に果樹と蔬菜が栽培されている。

遺跡の前面に当たる南方は、満々と水をたたえた旧湯山池が広がっていたが、江戸時代から徐々に行われた干拓により、現在は水田に変貌している。

対岸の摩尼山山系から幾重にも延びる丘陵先端部には、数多くの古墳が存在し、県東部の湖山池、県中部の東郷池のように、湖畔に突き出た丘陵上に多くの古墳群が築造されている形態に類似するものと思われる。

海士32号墳の南東対岸には、立岩山の麓に鳥取県指定の天然記念物「坂谷神社社叢」が広がっている。このうっそうと緑一色に染まった社叢林は、高木層にスタジイの巨木をはじめ、ヤマツバキ・カゴノキ、亜高木層にモチノキ・サカキ・シロダモ、低木層にゴンズイ・ヌルデ・コショウノキ、草本類にホシダ・オニヤブソテツ・イワタケソウ・クリハランなどが代表される植物で、南限・北限として知られる多種類の植物が混生し、県内でも例の少ない^(註2)照葉樹林帯である。

小溪谷の坂谷神社社叢の南方約500mには、縄文時代後期を主体とする栗谷遺跡が所在し、近年の発掘調査では、多種多様な遺物が出土したことから注目されている。塩見川を介して対面する南方約200mの通称「蔵の山」と呼ばれている丘陵尾根の先端部一帯は、本村で最も密度の高い約60基の古墳が確認されている地域で、「^{やだに}箭溪古墳群」の中核となっている。

この塩見川上流約2kmには、南限の植物とされているクリハランなどの貴重な植物の宝庫として保護されている標高約80mの「^{のうだ}南田神社」の社叢が小さな独立峯のような風情を見せている。

この福部の地に、人の生活が営まれ始めたと推定される縄文時代前期は、いわゆる縄文海進によって現在の平野部の大半が日本海に没する入り海若しくは、島根県の宍道湖のように海水と淡水が交じり合う汽水湖であったと考えられている。人々はこの福部の地一帯をテリトリーとして、狩猟、採集、魚撈を糧とする生活を送っていたものと考えられ、安定して食糧を供給できる永住しやすい地域であったものと推定される。しかし、直浪遺跡と栗谷遺跡が対岸とは言え、近接しながら双方の遺跡ともに縄文時代・弥生時代・古墳時代と永期にわたり、同じ場所での生活が営まれていることは、この外海に通ずる入り江を拠点とした舟による海上交易も大きな要因を占めていたものと思われる。

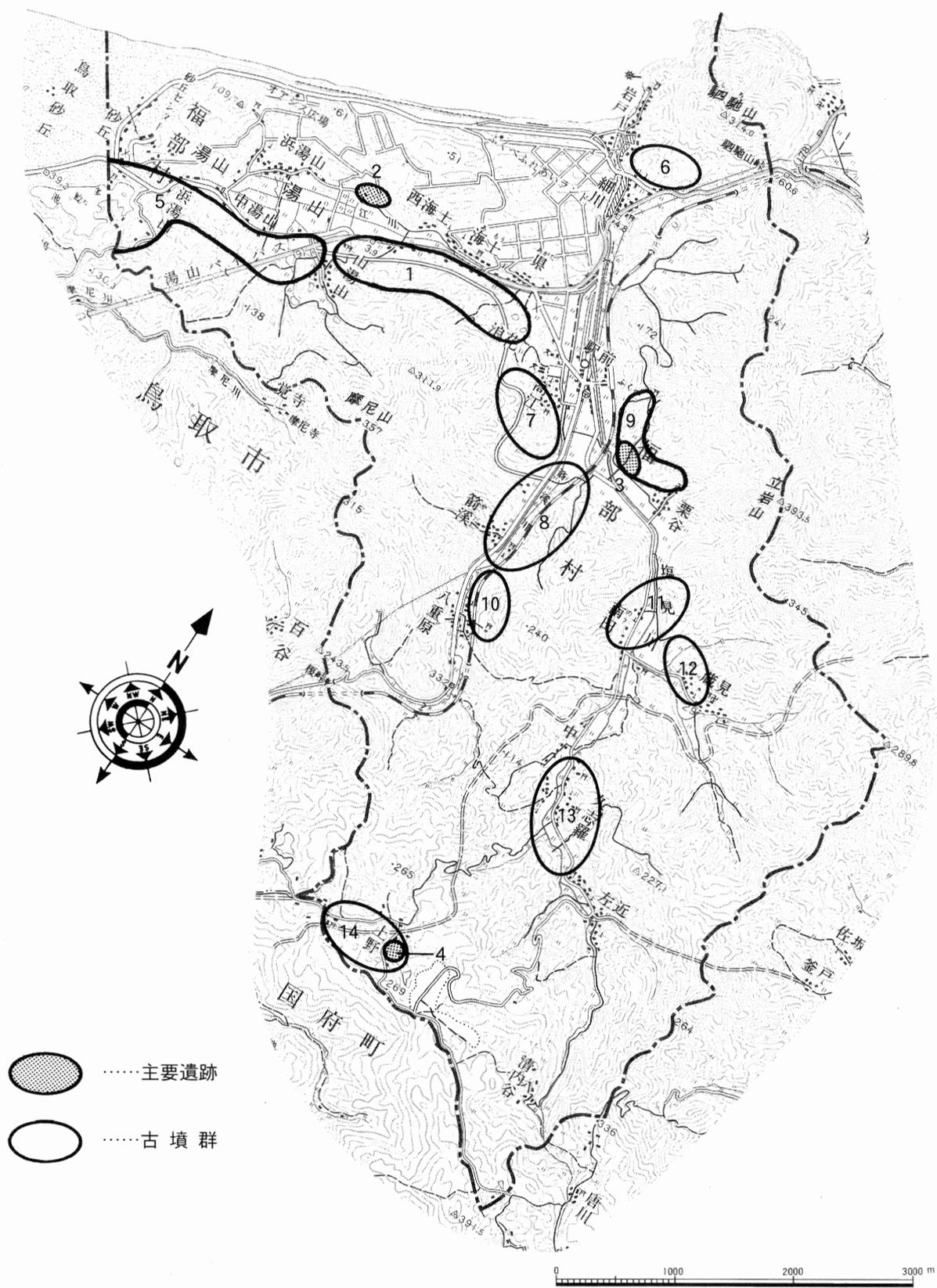
註1 福部村教育委員会『福部村内遺跡発掘調査報告書』1995

註2 福部村『福部村誌』1941

第2節 海士古墳群の歴史的環境

福部村内では、旧石器時代の遺跡・遺物は発見されていないが、鳥取県東部に分布する縄文時代の遺跡では、早期の押型文土器が出土している鹿野町の柄杓目遺跡に次いで、栗谷遺跡が前期まで遡る遺跡として確認されている。栗谷遺跡の発掘調査では、ドングリ・クルミ、トチの実などを貯蔵した37基の貯蔵穴群と土器・石器の他、木器・網代編みの籠・もじり編み技法による網などが低湿地遺跡特有の良好な遺存状態で検出された。これら多種多様な出土遺物は、縄文時代の生活様式を知ることのできる貴重な資料として平成6年に61箇が「重要文化財」に指定されている。

近隣では、福部砂丘に境を接する鳥取市の浜坂砂丘地の中で「浜坂追後遺跡」・「長者ケ庭遺跡」・「栃木山



挿図2. 福部村内遺跡分布図

- | | | | | |
|-----------|-----------|------------|------------|------------|
| 1. 海士古墳群 | 2. 直浪遺跡 | 3. 栗谷遺跡 | 4. 上野遺跡 | 5. 湯山古墳群 |
| 6. 細川古墳群 | 7. 高江古墳群 | 8. 箭溪古墳群 | 9. 栗谷古墳群 | 10. 八重原古墳群 |
| 11. 南田古墳群 | 12. 蔵見古墳群 | 13. 久志羅古墳群 | 14. 上野山古墳群 | |

遺跡」が縄文時代の遺物散布地として知られている。この他湖山池の南岸に所在する「布勢遺跡」では、土器・石器・木器などが多量に検出され、南岸に所在する「桂見遺跡」では、平成5年の発掘調査で縄文時代後期の丸木舟が出土しているが、現存するものとしては国内最大級のものである。

現在までに因幡地方で発見されている縄文時代の主要遺跡は、湖岸のような水辺に近い場所を拠点として分布している。

弥生時代になると稲作が普及し、各石器の他に金属器の使用が始まり、隣接する岩美町新井の丘陵部で流水文銅鐸が出土し、浜坂砂丘や湖山砂丘では、銅鏃・鉄鏃が発見されている。

縄文時代に人々が定住した栗谷・直浪の両遺跡でも弥生時代の人々が継続して生活していたことが土器・石器などから明らかとなっており、塩見川の源流である上野山台地（標高250m）では、畑地の開墾時に弥生時代中期の土器・扁平片刃石斧などが採取されて「上野遺跡」（4）の存在が確認されている。

上野遺跡は、栗谷遺跡、直浪遺跡とは異なった山間地に所在することから、高地性集落遺跡との関連も注目すべきである。この後古墳時代へ移行すると、共同体の高い地位にあった者の死にあたって、壮大な高塚を築き、多くの副葬品と共に手厚く埋葬する風習が広まり、因幡地方にも畿内の様相をおびた大型の古墳が築造されている。村内でも古くから数多く古墳が確認されており、約200基を越える古墳が11群にまとめられて展開している。墳丘の形態は前方後円墳・方墳・円墳・横穴と多種に渡るが、その大半はラグーンを見下ろす丘陵の尾根に分布しており、後期古墳に見られる横穴式石室は、平野部から山間部に分布する特徴を示している。

村内における古墳の発掘調査は、その大半が開発に伴う調査であり、「湯山6号墳」では小札を柎の葉状にカットした特異な「小札鋌留眉庇付冑」、^{（註2）}「三角板革綴短甲」、「鉄刀」、「鉄鏃」等の武具がセットで副葬されていた。また「蔵見3号墳」では、全国的に類例の少ない八角形の平面プランを持つ墳丘と、中高式天井石室内から類例の無い鴟尾付陶棺が検出されている例が特筆される。

遺跡の発掘調査例では、直浪遺跡の丘陵台地で採砂作業中の工事関係者によって「柱穴群」が発見され、発掘調査の結果、5世紀から6世紀に渡り継続的に居住したと推定される竪穴式住居跡（1棟）・掘立柱状建築遺構（3棟）^{（註3）}を検出している。尚、この遺構は、調査終了後埋戻されて現在も保存されている。

古代に律令制が確立された時期には、福部村一帯は、因幡国法美郡服部郷に属しており、海士と八重原には、式内社があった。隣町の岩美町では国の史跡指定となっている白鳳期の岩井廃寺塔跡も遺存し、上野山を越した国府町中郷には因幡の国府が置かれていた。以後この国府町一帯が政治・経済・文化交流の中心地として繁栄して行き、奈良時代の官立寺院である金光明四天王護国之寺（国分僧寺）、法華滅罪之寺（国分尼寺）が建立されている。

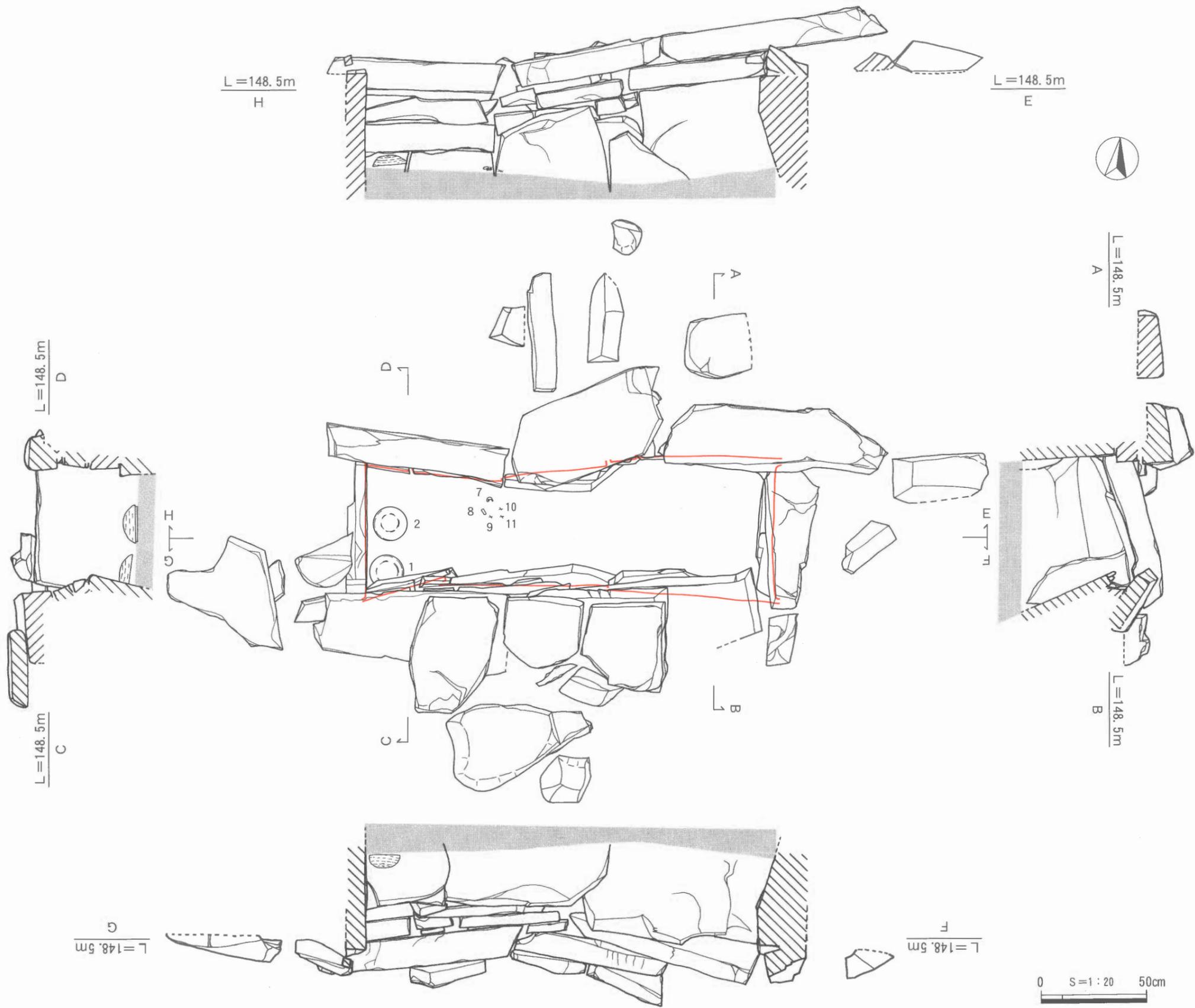
本村には、この時代を特徴付ける出土品は極めて少ないが、箭溪の墓地で墓穴を掘り下げ中に土師質の「経筒」が出土している。この経筒は、上部がやや広がった高さ24cmの円筒形を呈し、蓋の中心部はキューピー人形の頭のような突起状の特徴あるつまみを有しており、現在は鳥取県立博物館に保管されている。^{（註4）}

註1. 福部村教育委員会『栗谷遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』1989・1990

註2. 福部村教育委員会『湯山6号墳発掘調査報告書』1978

註3. 福部村教育委員会『直浪遺跡発掘調査報告書』1976

註4. 鳥取県埋蔵文化財センター『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財シリーズ4. 1989



挿図7. 海士32号墳埋葬施設(石棺) 実測図

No.	古墳名	所在地	墳丘形態	石棺規模cm (長×最大幅×深)	床面構造	出土遺物	時期	備考
1	海士32号墳	福部村海士字茶園湯谷口	円墳	185×65×50	地山面・ 平 坦	須恵器類 須玉	6世紀中	
2	縁山1号墳	福部村海士字白路ヶ山	円墳	229×100×90	床面平坦	須恵器類 須鉄	6世紀後	
3	縁山2号墳	福部村海士字白路ヶ山	円墳	185×75×65	地山面・ 平 坦	須恵器類 須鉄	6世紀後	
4	高江2号墳 (1号石室)	福部村高江字流山	円墳	190×45×40	板状敷石 平 坦	土師器 (器台枕)	5世紀前	
5	高江2号墳 (2号石室)	福部村高江字流山	円墳	160×45×30	地山面・ 平 坦	板石枕	5世紀前	
6	栗谷15号墳	福部村栗谷字上岡崎	不明	不明	不明	不明	不明	
7	高野坂14号墳 (第2主体部)	岩美町岩常字高野坂	円墳	75×50×51		須恵器	6世紀後	横穴式石室内
8	開地谷6号墳	鳥取市浜坂字開地谷	円墳	215×88×94	板状敷石 に砂敷き	須恵器・ 鉄器他	6世紀後	
9	開地谷9号墳	鳥取市浜坂字開地谷	円墳	160×65×80	地山面・ 平 坦	須恵器・ 鉄器・ 須玉類	6世紀後	
10	開地谷12号墳	鳥取市浜坂字開地谷	円墳	189×45×34	板状敷石 に砂敷き	鉄 剣	5世紀?	
11	開地谷21号墳	鳥取市浜坂字開地谷	円墳	152×38×56	地山面・ 平 坦	須恵器・ 須玉類	6世紀後	
12	開地谷23号墳	鳥取市浜坂字開地谷	円墳	190×66×50	地山面・ 平 坦	鉄器・ 須玉類	5世紀?	
13	面影山33号墳 (第1主体部)	鳥取市面影字大谷	円墳	188×53×30	地山面・ 平 坦	土師器	4世紀後	人骨3体
14	御興谷6号墳	鹿野町今市字御興谷	円墳	180×47×78	不明			
15	中峰1号墳	倉吉市和田字中峰	円墳	189×38×30	砂敷き	土師器	4世紀前	
16	猫山1号墳	倉吉市上神字猫山	方墳	200×50×35		土師器	4世紀後	
17	夏谷3号墳 (1号埋葬施設)	倉吉市和田字夏谷	方墳	253×42×59	砂敷き	土師器・ 鉄器・ 須玉類	4世紀後	人骨3体

挿表2. 鳥取県内の石棺系小竪穴式石室一覧

第V章 出土遺物

海士23号墳から出土した遺物は、削平された墳頂部の攪乱層中で検出された須恵器片と石棺内から蓋坏が1セット、玉類5点が出土している。墳頂部の攪乱層中で検出された須恵器は、完形品や器形全体がわかるものは無く、大半が10cm以下の細片になっている。そのうち、推定復元が可能であったものは、蓋坏（有蓋高坏）、甕（四耳甕）である。

1. 須恵器（1～6）

蓋 坏

立ち上がりを有する蓋坏（1～4）がセットが出土している。そのうち、石棺内の西小口で検出された蓋坏（1・2）は、海士32号墳の埋葬時期を特定する唯一の資料である。

坏 蓋

（1）は、坏身（2）とセットになるもので、石棺内西小口の南側に坏蓋を据え、北側に坏身の底部を上に向け、伏せて置かれていたことから、被葬者の土器枕として置かれたものと推定される。

口径15.2cm、器高4.5cmを測る。胎土は0.5mm～1mmの砂粒を含み、焼成は不良で脆く、色調は暗灰色を呈している。天井部と口縁部を境する一条の沈線によって区画されている。口縁内面には段を有する。天井部内面中央に円弧叩きが残し、内外面共に反時計回りのヘラ削りの後ヨコナデを施している。

（3）は、坏身（4）とセットになるもので、墳頂部の攪乱層中から細片状態で検出され、約2割程度が復元された。坏蓋は天井部が欠損し、坏身は底部が欠損しているが、鍋型の深い器形で大型品であると推定されることから、坏蓋の天井部外面につまみ部、坏身底部外面に脚が取り付く有蓋高坏であった可能性もある。

復元口径25.0cm、器高の推定値は10.5cm程度と思われる。胎土に0.5mm前後の砂粒をやや含む。焼成は好で、色調は暗灰色。天井部と口縁部の境は一条の稜が巡り、口縁部に段を有する。内外面ともにヘラ削りの後ヨコナデを施してしる。

坏 身

（2）は、口径13.3cm、受部径15.9cm、器高5.3cmを測る。胎土は0.5～1.5mmの砂粒を含み、焼成は不良で脆く、色調は淡灰色を呈している。受部は上方につまみだし、立ち上がりは内傾している。底部内面中央に円弧叩きが残し、内外面共にヘラ削りの後ヨコナデを施している。

（4）は、坏部の復元口径23.0cm、受部径26.0cm、器高の推定値は12.0cm程度と思われる。胎土は0.5mm前後の砂粒を含み、焼成はやや不良で脆く、色調は暗灰色を呈している。受部はやや上方につまみだし、立ち上がりは内傾して立ち上がる。端部に段を持ち、内外面共にヘラ削りの後横ナデを施している。

甕

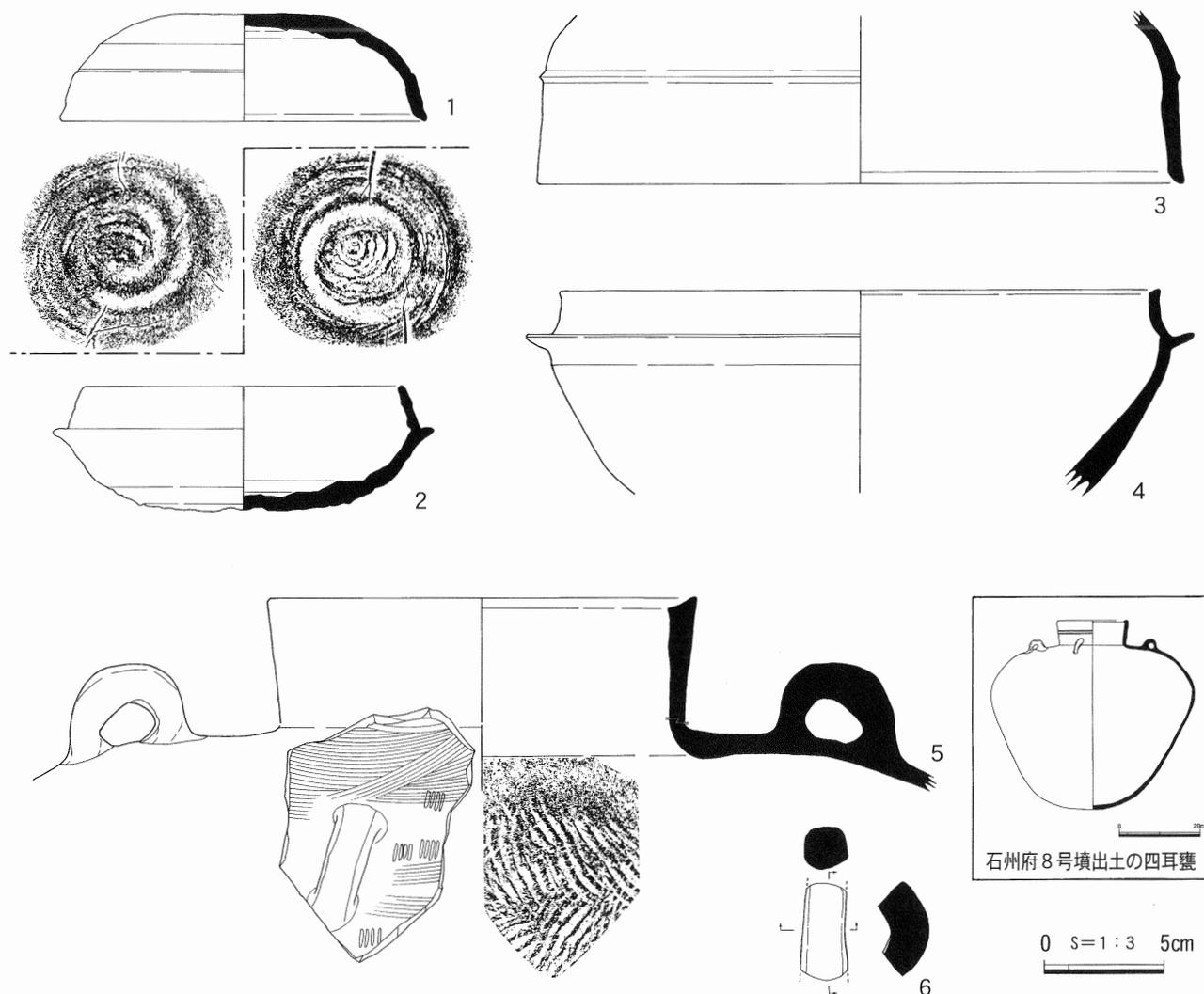
甕（5）は、前述の蓋坏（3・4）と混在して検出された。同一個体として特定できる破片が少なく、器形全体を復元することはできなかったが、口縁部から肩部にかけてを推定復元した。甕は、法量的な値を求めることは不可能であるが、調整後に貼り付けられた輪状把手部の角度が頸部に対し著しく傾斜していること、胴部の湾曲形状から、大形の四耳甕であると思われる。

復元口径は18cm、残存高は8cmを測る。口頸部は強く張る肩部から僅かに外反して立ち上がり、口縁端部

は内傾して下方に拡張する。口頸部は内外面共に後横ナデを施し、胴部内面に円弧タタキを残し、肩部外面に叩き痕を消すナデ調整が施され、強くつまむ事で接合部が細くなった輪状把手が貼り付けられている。

胎土は、1mm程度の石英を僅かに含み、焼成は良好で、内外面共に淡灰色を呈し、口頸部外面と輪状把手部には焼成時における暗灰色の自然釉が付着している。

(6)は、甕(5)と同一個体の輪状把手部で、前述の蓋坏(3・4)と同じ攪乱層中で検出されたものである。



挿図8. 海士32号墳出土遺物実測図(須恵器)

2. 玉製品(6~10)

玉製品は、勾玉1個、管玉1個、ガラス小玉3個の計5個が出土しており、いずれも被葬者の胸部と推定される部位の床面から検出されたものである。

勾玉

勾玉(7)は、暗緑色の碧玉製で、長さ29.3mm、外径9.1mmを測る。形状は、緩やかに湾曲して丸みをおび、やや細身で、直径3.9mmの孔を片面穿孔されている。

管 玉

管玉(8)は、水晶製の円筒形で風化が著しく、やや曇りガラス状の半透明である。最大径10.7mm、長さ26.5mmを測り、直径3.8mmと4.1mmの孔を両面穿孔されている。

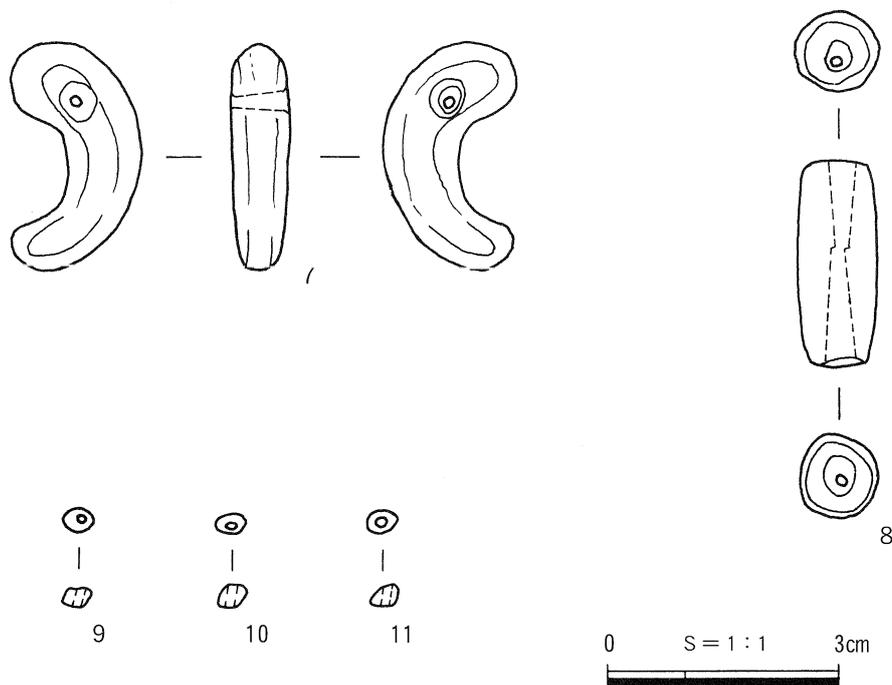
小 玉

小玉(9~11)は、いずれもガラス製である。

(9)は、半透明の淡紺色を呈し、最大径3.7mm、孔径1.4mm、長さ3.4mmを測る。

(10)は、半透明の淡青色を呈し、最大径4.0mm、孔径1.5mm、長さ3.0mmを測る。

(11)は、半透明の薄暗青色を呈し、最大径3.6mm、孔径1.6mm、長さ2.8mmを測る。



挿図 9. 海士32号墳出土遺物実測図 (玉製品)

第Ⅵ章 海士32号墳発掘調査の成果

海士古墳群の大半は、比較的標高の低い丘陵尾根端部に分布し、1981年に発掘調査された5世紀後半の築造と推定されている海士23号墳、6世紀後半の築造と推定されている同24号墳の2基以外に古墳の概要を知ることにはできない。

今回の調査対象となった海士32号墳は、入り海であったと推定される福部の湿田地域と鳥取砂丘を眺望する高所に所在し、海士31号墳とともに開発事業の事前踏査で新たに発見された円墳である。古墳の所在する丘陵の稜線は南東から北西に向けて急傾斜している。両古墳の比高差は、約10mを測るが、距離は約30mと比較的近い位置に所在している。これに比して同一丘陵尾根端部の標高約30m～50m付近に所在する10基の古墳は、犇めくように近接している。最高所に位置する31号墳までの比高差は約90mを測り、約400mとかなりの距離を置いて所在していることから、丘陵尾根端部周辺に展開する古墳群の一部とは別格の認識をもってみるべきであろう。

墳丘

墳丘は丘陵の稜線が南東に屈曲し、狭長な自然テラス状を形成する尾根上に築造されている。したがって、北西にやや張り出した感は否めない。規模としては、小型に属する円墳で村内でも同規模程度の墳丘が最も多く見られるが、墳丘を覆っていたであろう封土は蓋石から上面が削平を受けており、墳丘の高さを特定することはできなかった。しかし、周囲に見られる排土の堆積状況から推測すると、大量の盛土が施されていたとは考え難い。

埋葬施設は、蓋石が全て搬出されていたこと、今回の調査が遺跡の有無を特定する試掘調査であること等の制約から、墓壙面の検出までには至らなかった。したがって、主体部内面から概観する調査が主なものとなったが、古墳として確認されたことで、自動車・携帯電話の中継基地局建設位置を墓域から外し、古墳は埋め戻されて保存されることになった。

埋葬施設

検出された埋葬施設は、棺材に角閃石安山岩の扁平石を横積した「石棺系小竪穴石室」と呼ばれる特異な構造を持つ石棺であった。前期古墳の主体部に見られる竪穴式石槨と比較すると、小口石を立てる点を除けば、両側面に板石を横積していることから、壁体の構築方法は竪穴式石槨に類似している。しかし、竪穴式石槨内部の施設、構造の特徴である粘土棺床やその上に納められる割竹形木棺は採用しないで、棺内に被葬者を直葬していると考えられる。したがって、竪穴式石槨状の形態を意識しながらも普遍的な箱式石棺の規模であり、外見的には竪穴式石槨を小型化したものと考えてよいであろう。

このような石室、石棺の構造を持つ村内での類例は、高江1号墳をはじめ6例が知られており、近隣では鳥取市の面影山33号墳第1主体部、最近の発掘調査では倉吉市の中峰1号墳が類例として報告されている。

石棺系小竪穴石室の形態、特徴に類似すると思われる古墳が鳥取県下で18例(表2)が確認されている。特定されている築造年代は4世紀前半から6世紀後半までかなりの時期幅があり、この永い築造期間から竪穴式石槨が衰退化する過程の形態とは考えにくく、竪穴式石槨の手法を引き継ぐ地域色の強い埋葬施設を示すのではなかろうか。

出土遺物

海士32号墳の出土遺物は、墳頂部の攪乱層から検出された蓋坏、甕、主体部内から検出された蓋坏、勾玉、管玉、ガラス小玉である。

これらは、墳丘の周囲に他の古墳・遺跡が所在しないことから、攪乱層で検出された遺物も含めて当古墳に伴うものと思われる。したがって出土遺物から推定する埋葬形態は、蓋坏を枕に転用して被葬者の頭部を乗せ、玉類の垂飾を胸部又は、首に掛て封棺した後、盛土を施して墳頂部周辺に大型の蓋坏（有蓋高坏）と輪状把手を有する四耳甕を供献土器として据えたものと推定される。

この大型の供献遺物については、葬送儀礼における在地の特異性を示すものと思われ、脚部が検出されていないことから有蓋高坏ではなく、蓋坏であった場合は類例の無い大型の蓋坏となる。又、県内での四耳甕の出土は、挿図8に示す米子市の「石州府8号墳」等の出土例が報告されているが、その類例は少いたため今後各地での調査成果に期待したい。

築造年代

古墳の築造年代を推定する資料となる蓋坏は、墳丘上の攪乱層で検出された蓋坏(3・4)が特殊な形態であることから、主体部内で検出された蓋坏が唯一の資料である。

坏蓋は口径15.2cmと比較的口径が大きく、天井も高く丸い、口縁部は天井からなだらかに外反してのび、端部は内傾して段を持つ。天井部と口縁部との境に沈線が巡る。

坏身は底部が比較的深く丸味を持ち、たちあがりは内傾して上方にのび端部は丸く仕上げている。受部は口径に比して短く、水平に近く、底部外面に回転ヘラ削り調整を施す。坏蓋の天井部及び坏身の底部内面に円弧叩きを残す。こうした特徴を大阪府陶器古窯址群の須恵器編年^(註1)に求めると、陶器編年Ⅱ型式2段階のみに比定されるものと考えられる。これにより海士32号墳の築造時期は6世紀の第2四半期に位置づけられる。

註1. 米子市教育委員会・石州府古墳群発掘調査団『石州府古墳群発掘調査報告書』1989

註2. 中村 浩『和泉陶器古窯址出土須恵器の型式編年』芙蓉書房出版。2001

報 告 書 抄 録

ふりがな	あもう32ごうふんはくつちようさほうこくしょ							
書名	海士32号墳発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	福部村埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第12集							
編著者名	谷岡陽一							
編集機関	福部村教育委員会							
所在地	〒689-0102 鳥取県岩美郡福部村大字細川668							
発行年月日	西暦2001年3月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あもう ごうふん 海士32号墳	とっとりけんいわみぐんふくべ 鳥取県岩美郡福部 そん あもう 村大字海士 ちやえん 字茶園201・ ゆたにくち 湯谷口248-4	31033	204	35度 32分 40秒	134度 16分 19秒	19971013~ 19971108	250	携帯・自 動車電話 中継局建 設 (試掘)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
あもう ごうふん 海士32号墳	古墳	6世紀中 葉	円墳 石棺系小竪穴式石 室 周溝	坏蓋 坏身 甕(四耳甕) 勾玉(碧玉) 管玉(水晶) ガラス小玉				

編 版 図



海士32号墳周辺の空中写真



② 海士32号墳から俯瞰する鳥取砂丘と日本海



① 海士32号墳遠景（北の砂丘地より）



④ 調査前の海士32号墳（南から）



③ 調査区全景（南東から）



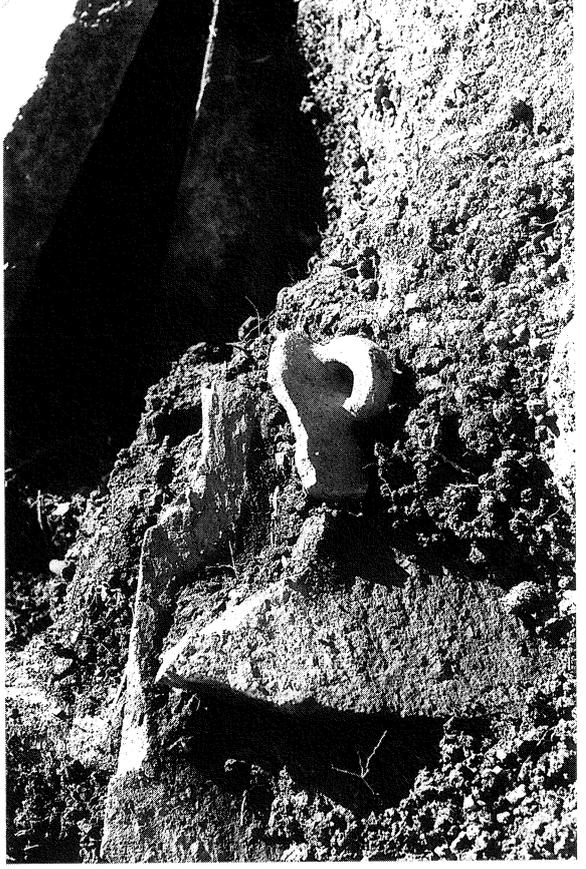
① 海士32号墳発掘調査作業風景



② トレンチ土層堆積状況（東から）



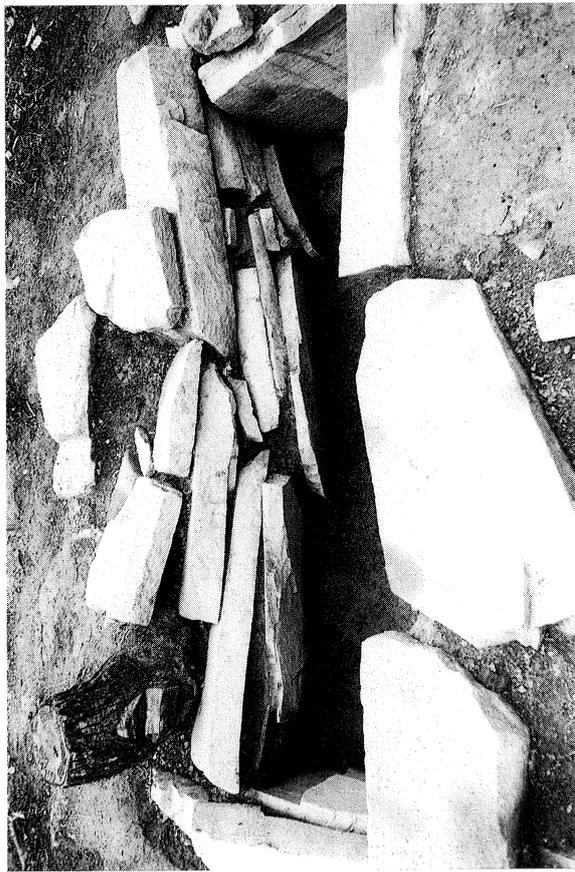
③ 海士32号墳埋葬施設検出状況



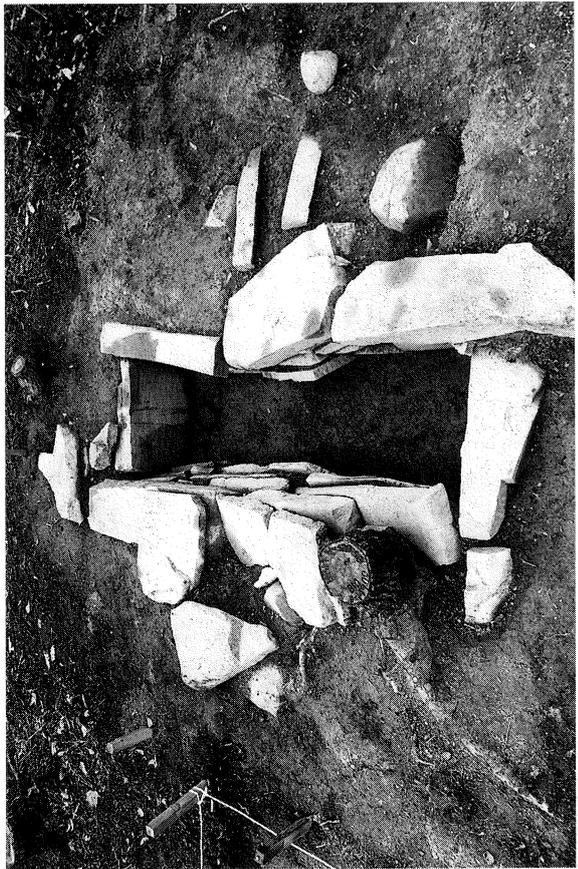
④ 墳丘上の供献遺物検出状況



① 埋葬施設完掘状況（南から）



③ 埋葬施設完掘状況（北から）



② 埋葬施設完掘状況（東から）



④ 埋葬施設完掘状況（西から）



棺内遺物検出状況（西から）



1



2



7



8



3



9

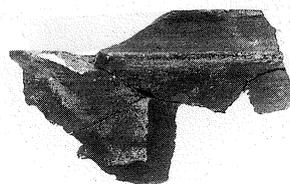


10



11

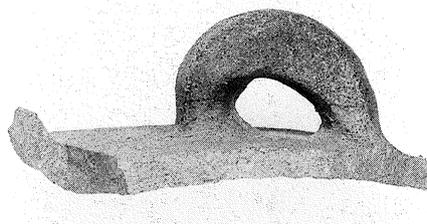
玉製品



4



5



6

福部村埋蔵文化財調査報告書 第12集

海士32号墳発掘調査報告書

平成13(2001)年3月発行

編集 福部村教育委員会

発行 〒689-0102 鳥取県岩美郡福部村細川668
TEL (0857) 75-2816

印刷 総合印刷出版株式会社

〒680-0022 鳥取市西町1丁目215番地
TEL (0857) 23-0031
